

あばらやの星

壺井栄童話集

文研出版



必読選定
文研児童読書館

定価
発行日
著者
発行者
印刷・製本

壺井栄童話集
あばらの星

550 円
昭和46年 4 月20日初版
壺井 栄
佐藤武雄
図書印刷株式会社



発行所

文研出版
東京都文京区向丘 2 丁目 3-10
TEL(03)814-2151
大阪市天王寺区大道 4 丁目 128
TEL(06)779-1531

© 1971 Printed in Japan

N. D. C.

913 あばらの星
文研出版 昭和 46 (1971)
248 p 23cm
必読選定
文研児童読書館

著者との契約により検印廃止

つばい
さかえどう
わしゅう
壺井栄童話集

あばらやの星

つばい
壺井 栄
・ 作

せき
関 英雄
・ 編

きたしま
北島新平
・ 絵

文
研
出
版



文研児童読書館のねがい

わたしたちは、わたしたちをとりまく、さまざまなものからいろいろな学^{まな}んで大きくなっていきます。学校での学習^{がくしゅう}からも、テレビやマンガからも、科学^{かがく}や知識^{ちしき}を身につけ、また楽しみを味わいながら育^{そだ}っていきます。

けれども、せっかちに知識^{ちしき}ばかりを自分のもの^のにすることや楽しさだけを急^{いそ}いで追^おうあまり、ともすれば、人生^{じんせい}の真実^{しんじつ}とは何か、人間^{にんげん}として、どのように生き^{いき}ていくべきか、ほんとうの美しさとは何か、というようにたいせつなことを、忘れ^{わす}れがちになるようです。これは、とても残念^{ざんねん}なことです。

そうならないためにも、わたしたちは人生^{じんせい}の教師^{きょうし}としての文学^{ぶんがく}、ただしい生き^{いき}方を身^みにつけさせてくれる読書^{どくしょ}というものをたいへん重要なもの^{じゅうよう}と考^{かんが}えています。

このたび、わたしたちは、多くの著^{ちやう}者^{しゃ}、訳^{やく}者^{しゃ}、画^が家^かのご協^{きやう}力^{りき}によって、今^{いま}なお新^{しん}鮮^{せん}な感^{かん}動^{どう}を与^{あた}えてくれる世^せ界^{かい}の名^{めい}作^{さく}文^{ぶん}学^{がく}、貴^き重^{じゆう}な文^{ぶん}化^か遺^い産^{さん}である神^{しん}話^わや民^{みん}話^わ、さら^さに伝^{でん}記^き、ノ^ん・フイ^きクシ^しョ^んン、または未^み紹^{しやう}介^{かい}の新^{しん}しい力^{りき}作^{さく}などを選^{えら}んで、文^{ぶん}研^{けん}児^じ童^{どう}読^{どく}書^{しょ}館^{かん}として、おとどけすることになりました。

みなさんがたの必^{ひつ}読^{どく}基^き本^{ぽん}図^と書^{しよ}として、いつまでも愛^{あい}読^{どく}していただけるものと信^{しん}じています。

編集委員

石森延男

昭和女子大学教授・日本児童文学学会会長

植田敏郎

一橋大学教授・日本児童文学学会理事

白木 茂

日本児童文芸家協会常任理事

関 英雄

日本児童文学者協会理事長

中川正文

京都女子大学教授・日本児童文芸家協会理事

福田清人

前立教大学教授・日本児童文芸家協会理事長

文研出版編集部



3185



も
く
じ

い
ん

十五夜の月……………	11
がきのめし……………	36
おかあさんのてのひら……………	54
あばらやの星……………	57
小さな物語 ^{ものがたり} ……………	74
あたたかい右の手……………	90
ヤナギの糸……………	107



あ	したの風	123
ど	んざの子	136
リ	ンゴのふくろ	148
一、茶	話 会	148
二、よいしよ、ペッタン		155
三、ほくろのおばさん		165
四、紙ぶくろとピアノ		182
五、三	輪 車	195
六、三	千 円	210
七、おかあさん、ごめんね		227
解説	壺井栄の児童文学	233
関	英 雄	

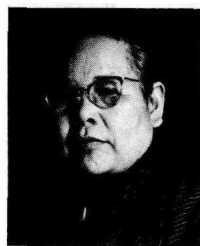
絵・北島新平



つばい
壺井 栄 童話集

あばらやの星





壺井 栄（つばい・さかえ）

一九〇〇年生——一九六七年死亡。
香川県小豆島の生まれ。大家族の中で苦勞して育つ。二十五才のとき上京し、壺井繁治と結婚。プロレタリア文学運動への弾圧の中で、夫やその仲間のために働く。三十六才前後から執筆をはじめ、児童文学では、「十五夜の月」で注目される。その後、生活に根ざした、愛情深い作品を次々と発表。特に、「二十四の瞳」は映画化され、強い感動を与える。

関 英雄（せき・ひでお）



一九一二年、名古屋市の生まれ。東京の旧制甲種商業学校卒。新聞記者、出版社員を経て、一九五〇年以后、著述生活にはいる。現在、日本児童文学者協会理事長。

著書、童話集「北国の犬」、評論集「新編児童文学論」等多数あり。

北島新平（きたじま・しんぺい）

一九二六年、福島県会津の生まれ。信州童画会会員。作品に、長野県南信地方に伝わる祭りのスケッチ集、

「遠山祭り」（昭和三十一年）

「坂部の冬祭り」（昭和三十九年）

「新野の雪祭り」（昭和四十年）

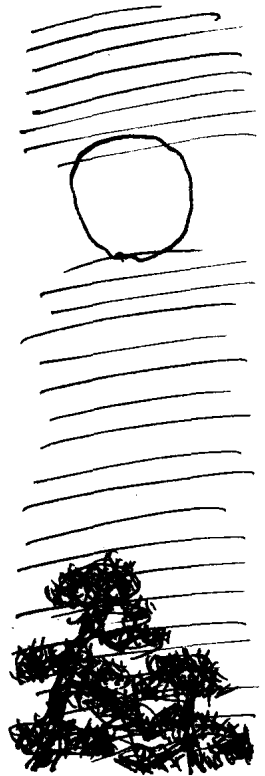
などのほか、「さようまんさまの夜」

「宮口しづえ児童文学集」「木の上のちっちゃな宇宙船」「わが母の肖像」など、情趣豊かなさし絵が多い。





十五夜の月



千代の生まれたのは瀬戸内海の島の中の、ある小さな村でありました。後ろが山で、前は、しずかな海です。沖から見ると、家々のたちならんだ村のまん中どころに大きなマツの木が二本、なにかの目じるしのようにえだを八方にひろげているのがめだちます。もしも空から見たならば、それは一本のマツの木のようにであるかもしれないし、またいく本もの木がむらがっていると見られるかもしれません。

それほどに大きくえだをひろげた、そのマツの屋根の下に、小さなほこらが二つならんでいます。大きなほうのほこらには恵比須、大黒をまん中にして、その両側に住吉、金毘羅と、四柱の神さまが沖をながめてならんでいます。西側のほこらには祇園さまがひとりまつられていました。この五柱の神さまのおすまいである神社を、村の人は「恵比須さん」といいならわしていました。

小さな杜の境内の東と西のすみに、そのマツの木はおい立っているのです。東のほうがすこし太くておマツ、西のがめマツでしたが、両方とも子どもが三人手をつないで、やっとなどくくらいりっぱな太



木です。まだ学校前の子どもたちは、ここに集ま
てきて、この二本のマツの木をとりまいて、

「ウシんなれ、ウマんなれ。」

となえながら、太いみきを平手でペタペタたたき
ます。

「ウシウシ出てこい、ウマウマ出てこい。」

ともいいます。いっしょうけんめい、たたいておい
て、つめではがすと、マツの皮はウシやウマの形に
はがされてきますが、ときにはラクダになったり、
思いがけないおにの面がとび出すこともありまし
た。マツの木はくる年もくる年も、日がなまいにち、村
の子どもにたたかれても、あきることなくウシやウ
マを生んでくれました。マツの皮のウシやウマは、
ほこらの前の石段や石どうろうの台石などにもたせ
かけてあそびます。あそびおわってうちへかえると

きには、まえかけの中へたいせつにしまつてもつてかえります。

このマツの木の根もとであそんだ日のことを思い出すたびに、千代は、じぶんをかわいがってくれたおばあさんを思いだしました。千代の家は、この神社の西どなりにあつて、神さまたちのほくらがマツの屋根の下にあるように、小さい草ぶきの千代の家も、やはりこのマツのえだにおおわれているような形で、一だんひくい場所にたつていました。朝おきると、千代はいちばんに井戸ばたへ顔をあらいにいきます。井戸は恵比須さんとのさかいにありました。そこからあまりひろくない境内は一目に見わたせました。

おばあさんが熊手をもつて、マツの落ち葉をかいているすがたは、孫の子もりをしたり、ごはんをたべたり、ぞうりをつくつたりするおばあさんのすがたと同様に、めずらしいことはありませんでした。おばあさんはこしが弓のようにまがつていましたので、熊手をつかうのはつらそうに見えましたが、ほうきをつかうのはらくらくとしたようすで、ときどき右手をまがつたこしの上にのせて、走るようにそこらをはいていました。恵比須さんのおそうじはおばあさんがひきうけていたようです。千代はときどきおばあさんについていつて、じぶんの背たけの二倍もある熊手を、ひきずるようにしてつかいました。たくほどは風がくれたる落ち葉かな

という、有名な一茶の句がありますが、それほどはなくとも、まいにちのかまどの下のたきつけにする

くらいは、すぐにかきよせられました。

このように、千代たちの一家は、村じゅうのどこの家の人たちよりも、恵比須さんとは縁がふかく、日々の生活の中には、マツの落ち葉まではいりこんでいました。

「このマツの木は、おばあさんの子どものじぶんには、ちっちゃい木であつたかいの。」

千代がおばあさんにきいたことができました。おばあさんは、

「そうじやのう。」

と、わすれていたことをかんがえだそうとするような顔つきでマツの木をあおぎ、

「ふしぎじやのう、ほんに、おばあさんが子どものじぶんにも、やっぱりこんな大きな木じやったがい。五十年、六十年、そんなはずはないけれど、あのえだの大きさも、それからヨシトク（フクロウのこと）が巢をかけとるあのえだも、むかしのままじや。」

指さされて千代は、空にもとどくかと思われる高いこずえを見あげました。ひとみをこらすとマツの木のとっぺんの方に小さな黒い鳥がとまっていて、まるで、千代たちの話をきいているかのように、うつむいて、こちらを見ていました。毎夜のように、ホー、ホーとあのヨシトクが鳴きだすと、千代たちはきょうだいげんかをやめて、夜具の中に身をちぢめ、いっしょうけんめいに目をつぶってねむろうとしました。そのおそろしい、きみのわるいふくろうが、こちらを見ている。千代はぞっとして、思わず

おばあさんにしがみつきました。

おふろ場のまどをあけると、祇園さまのほこらがすぐ目の前に見えました。湯ぶねにつかると、マツのこずえが空にひろがっているのが見えました。あらうのをいやがってぐずぐずいたり、三十かぞえないうちにおふろをあがりたがったりすると、おばあさんは神社にむかつて、

「祇園さん、恵比須さん、千代はいうことをよくききます。今夜はヨシトクを鳴かさんようにおたのもうします。」

千代はおばあさんのうでの中で、おとなしく、三十かぞえてくれるのをまちながら、どうぞヨシトクがなきませんようにと、心の中でいのりました。

そのヨシトクのすがたを、千代は、そのときはじめて見たのです。

それから何年かたち、千代はもうだいぶん大きくなりました。井戸ばたに植えたキリの木がぐんぐんのびるのを見て、ふと、おばあさんのいったことを思いだしました。

「おばあさんが子どものじぶんから、恵比須さんのマツの木が大きくなるとゆうたのは、ありやうそじやろがい。」

するとおばあさんは、とんでもないという顔つきでわらいながら、

「マツの木もな、ここまで古うなると、なかなかのびるのがめだたんわいの、五十年も六十年もたった